

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	「海外日本語教員ブラッシュアップセミナー」2022年度
Author(s)	迫田, 久美子
Citation	広島大学留学生教育, 27 : 74 - 78
Issue Date	2023-09-30
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/54875">10.15027/54875</a>
URL	<a href="https://doi.org/10.15027/54875">https://doi.org/10.15027/54875</a>
Right	
Relation	



# 「海外日本語教員ブラッシュアップセミナー」2022 年度

迫田久美子

## 1. はじめに

森戸国際高等教育学院は、本学の掲げる「平和を希求する精神を基盤としたグローバルに活躍する高度専門人材の育成」戦略のもと、海外在住日本語教員の再教育を通じて海外における日本語教育の高度化へと展開するための日本語・日本文化教育の拠点として、2018年10月に設置された。この目的を達成するための任務の一つとして、日本語教育を推進する海外協定校と連携した本学の日本語教育の海外展開を位置づけており、具体的な取り組みとして「海外日本語教員ブラッシュアップセミナー」(以下、「セミナー」)が企画された。

本稿の目的は、グローバルに活躍する高度専門人材の育成を掲げ、知識のみならず運用能力を伴った日本語能力、日本語・日本文化の研究力、そして高度な技術と新しい理論を備えた指導力の向上を目指して実施された過去2回のセミナーを踏まえ、2022年度のセミナーの実践報告を行うことである。

## 2. これまでのセミナー報告

### 2.1 第一回(2018年度)のセミナーの概要

第一回セミナーは、2018年5月20日(日)～6月3日(日)の2週間で開催された。「個々のニーズに対応した日本語指導と言語研究のスキルアップ」を掲げ、他の教員再研修との違いを明確にしたセミナーと位置付けた。そのため、セミナーに先立って、セミナー開始の2週間前までに1)日本語学習歴、教育歴、職歴(2)日本語能力(3)日本語指導能力(4)研究能力などの事前のアンケートを実施し、参加者一人ひとりのニーズを分析するなど緻密に準備を行った。

学外からの招聘講師には、日本語学が専門の砂川有里子氏(筑波大学名誉教授)と日本語教育学が専門の山田智久氏(当時 北海道大学)を迎え実施した。

参加者は、中国から3名、インドネシアから2名、台湾から1名の計6名であった。事前のニーズ調査に加え、参加者自身が自己のコースデザインを行い、主体的な学びを目指し、セミナー中も毎日の受講内容を記録し、質問や意見などを加えて提出してもらい、セミナー全体のコーディネーターがその日の記録に対し、フィードバックを行った(セルフコースデザイン・シート)。また、日々の授業終了後、その日の活動を振り返り、参加者自身の気づきを記録し(気づき&振り返りシート)、学びの意識化を試みた。

どちらのシートにも、参加者それぞれの個性が表れ、日々の変化が観察され、セミナー

の成果が感じられるものだった。

また、最終日には日程、費用、宿舎、授業内容についてのアンケート調査も行い、次回からのセミナーの参考となる資料になった。

## 2.2 第二回（2019年度）セミナーの概要

第二回セミナーは、2019年7月22日（月）～8月2日（金）の2週間、一回目とほぼ同様に「個々のニーズに対応した日本語指導と言語・言語教育研究のスキルアップ」を目標に実施した。

学外の講師には、日本語教授法が専門の嶋田和子氏（アクラス日本語教育研究所代表）、日本語学の研究が専門の井上優氏（麗澤大学）、社会文化学が専門のトムソン千尋氏（ニューサウスウェールズ大学）を招聘して行った。

参加者は、当初12名の定員だったが、結果として、中国から14名、インドネシアから2名、計16名となったため、日本語能力の評価を参考に、AグループとBグループに分けて対応した。

最終日は、成果発表として各自が研究テーマに沿って、ポスター発表を行った。以下は、そのテーマの一部である。

- ・日中日本語教師における作文評価基準に関する研究
- ・日本語学習者と日本語母語話者の「って」の使用について
- ・中国人学習者の日本語連体修飾の習得研究—寺村誤用例集データベースに基づいて—
- ・コミュニケーションにおける中国語の「嗯」と日本語の「うん」の使用実態
- ・第二言語としての日本語習得におけるディクトグロスの効果

## 3. 本年度（2022年度）のセミナーの報告

### 3.1 セミナーの概要

2020年度および2021年度は、コロナ禍のためセミナーの実施は見送られ、第三回セミナーは2022年8月1日（月）～12日（金）の日程で、オンラインによる開催となった。第一回・第二回と異なり、オンラインによるセミナーの利点を生かし、前半は日本国内および海外の著名な教員・研究者を一堂に会した講義中心の内容、後半は指導法を中心とした講義と個別指導を行った（表1参照）。

表1 第三回 海外日本語教員ブラッシュアップセミナーの日程と担当講師

日程	午前（10：00～11：30）	11：45～12：30	午後（13：30～15：00）	時間外
	■研究力養成	■日本語力	■指導力養成	
1日（月）	當作靖彦（UCサンディエゴ校）	迫田久美子	西原鈴子（日本語教育研究所）	広大教員
2日（火）	井上優（日本大学）	陳 斐寧	濱川祐紀代（早稲田大学）	によるオ

3日(水)	トムソン木下千尋(豪州 UNSW)	迫田久美子	嶋田和子(アクラス日本語教育研究所)	オンライン 個別指導
4日(木)	渋谷勝己(大阪大学)	陳 斐寧	曹 大峰(北京外国語大学)	
5日(金)	伊東祐郎(国際教養大学)	迫田久美子	西口光一(広島大学)	
	■授業改善力養成	■日本語力	■専門別グループ指導	
8日(月)	横溝紳一郎(西南学院大学)	迫田久美子	グループ・個別指導(広大教員5名)	
9日(火)	横溝紳一郎(西南学院大学)	陳 斐寧	グループ・個別指導(広大教員5名)	
10日(水)	山田智久(西南学院大学)	迫田久美子	グループ・個別指導(広大教員5名)	
11日(木)	山田智久(西南学院大学)	陳 斐寧	グループ・個別指導(広大教員5名)	
12(金)	研究発表 および 全体総括 (広大教員5名)			

セミナーでは、以下の4点を目標に設定し、オンラインの利点を活用し、かつ個々の参加者のニーズを踏まえた体験授業を重視して実施した。

- (1) シャドーイングや読解を中心に個別の弱点を踏まえ、日本語能力のさらなる向上を目指す。
- (2) 研究や教育における専門家の講義を通して、個別の研究および教育活動に生かす。
- (3) アクティブ・ラーニングやオンライン授業について、体験しながら学ぶ。
- (4) 最終日に受講生による成果発表を行う。

### 3.2 講師と講義概要

表2 セミナーの講師・専門領域と講義概要

講師氏名	専門領域	講義概要
當作 靖彦	日本語教育学	「学習効果を上げる環境づくり：研究に基づいた実践、実践に基づいた研究」というタイトルで講義を行う。
井上 優	日本語学	日本語の面白さ、言語研究の楽しさについて実践例を示し、述べる。
トムソン 木下千尋	日本語教育学	海外日本語教師が教育現場を研究する場合の多様なアプローチについて紹介する。
渋谷 勝己	日本語多様性研究	社会言語学的観点から研究の面白さを紹介する。
伊東 祐郎	評価・テストング	海外の日本語教育における「評価」の重要性と課題について紹介する。
西原 鈴子	日本語教育学	これからの日本語教師に求められる資質や姿勢などについて述べる。
濱川 祐紀代	漢字教育	日本語学習者に対する多面的な漢字教育の実践方法を紹介する。
嶋田 和子	日本語教授法	「社会的存在」として学習者を捉え、人・社会とつながる日本語教育を目指した実践について、さまざまな実践事例を示しながら述べる。
曹 大峰	日本語教育学	教育と研究の融合をふまえ、日本語教育のためのコーパスやデータベースについて、その構築と応用研究の事例と方法を紹介する。
西口 光一	ことば学 日本語教育学	人間にとって、人にとって、言語(ことば)とは何かについて検討し、言語教育における当事者中心の視点の重要性を指摘する。
横溝 紳一郎	教師教育学	アクティブ・ラーニングの視点にもとづく、実践改善の方法を紹介する。
山田 智久	教育工学	オンライン授業との望ましい向き合い方と効果的な活用方法を考える。

陳 斐寧	日本語教育学 日本文化論	スキミング・スキヤニング力の技能を伸ばし、読解力の向上を目指す。受講生の関心や専門に応じ、研究力や教育力の個別指導を行う。
迫田 久美子	第二言語習得研究	聴解力を伸ばし、シャドーイングによって発音・発話能力の向上を目指す。受講生の関心や専門に応じて、研究力や教育力の個別指導を行う。
西口 光一	日本語教育学	受講生の関心や専門に応じて、研究力や教育力の個別指導を行う。
田北 冬子	異文化コミュニケーション学	外国語学習において、異文化理解、異文化コミュニケーション能力の重要性について学ぶ。多様性の中でのコミュニケーション能力について考える。
柳本 大地	言語心理学	学習者の学びの過程を、記憶と理解の観点から考察する。または、学習者の相互的な学びを促す授業づくりについて考える。

### 3.3 参加者と成果発表

当初、参加者は12名であったが、中国のオンライン接続の不具合等で、結果的に成果発表まで出席した参加者はインドネシアから4名、中国から3名の7名となった。

成果発表は、スライド（PPT）を用いて、質疑応答を含め一人20分の発表を行った。以下は、参加者の発表タイトルである。

- ・インクルーシブ教育における日本語指導
- ・日本語教育の実践活動とその改善点について
- ・現代インドネシアにおける「日本食」作り
- ・日本におけるLGBTを支援するNPO活動やそのプログラム
- ・莫言氏の翻訳の中の文化的語彙の翻訳
- ・「あん」の映画に映る日本人の自然観の分析
- ・ヒロインよりヒーロー：ももいろクローバーZのイメージ構築

### 4. おわりに

本年度は第三回の開催となったが、過去第一回と第二回とは異なり、オンラインでの開催としたため、以前のセミナーとは全く異なる企画で行った。大きな特徴は、全体を通して、国内外の著名な研究者の12科目の講義が少人数で受講でき、オンラインの画面を通して、直接、講師に質問をしたり、不明な部分を確認したりできることであった。また、広島大学の専任教員が1～2人の参加者の研究指導の担当教員となり、個別指導から成果発表まできめ細かな指導を行った。

しかし、参加者によっては居住地域のインターネット接続の不具合などで、講義が十分に受講できず、途中で受講を断念したり、夏季休暇中だったりしたこともあり、実際の授業参観もできなかったなど、今後のセミナーを企画するうえで反省すべき点もあった。

また、オンライン形式には、渡航や宿泊が不要という便利さがある一方で、日本への渡航の魅力や日本文化に触れる機会がほぼないことを考えると、開催形態も今後の課題の一つである。

第三回目のセミナーは、コロナ対応の事情によって、海外から3名、国内から8名、計

11名の著名な講師を招聘したことで、貴重な講義を提供できるという新たな取り組みを行ったが、一方でネット接続の不具合や授業参観が実施できないなどの新たな問題点も出てきた。

次回のセミナーでは、今回およびこれまでの取り組みを踏まえ、さらに進化したブラッシュアップセミナーが提供できるように検討を重ねて行きたい。